

地域の伝統を受け継いで

相馬双葉漁業協同組合請戸支所青壮年部

叶 谷 貴 徳

1. 地域及び漁業の概要

相馬双葉漁業協同組合請戸支所は、福島県沿岸の中央部に位置しており双葉地方の漁業の中心となっている。請戸支所の正組合員は 160 名、准組合員 66 名で、主な漁業は固定式刺網、機船船曳網であり、平成 19 年の水揚げ数量は 2,104 トン、金額で 8 億 5,000 万円だった。

2. 研究グループの組織と運営

我々請戸支所青壮年部の部員は部長以下 19 名で、漁青連への参加、研修などの活動の他、主に磯根資源調査を通じて藻場造成やアワビ種苗の放流調査などに取り組んできた。また、定期的に行われる請戸夕市にも参加している。

3. 活動課題選定の動機

請戸地区は昔から漁業が盛んで、漁業に関係する習慣や風習が多く残っている地区でもある。例えばお船玉様、漁船による出初め式、あんば様などだが、いずれも茗野(くさの)神社に関係しており、この神社が請戸地区の信仰の中心となっている。

この中でも、最も盛大な祭りであるあんば様では、祭りの目玉とも言うべき樽神輿を私たち青壮年部が担いでいる。神輿を担いで真冬の海に入るので非常に大変な役割なのだが、地域の伝統として参加していたあんば様の事はあまりよく分からなかった。あんば様についてもっと詳しく知りたいとの思いから、祭りについて調べてみることにした。

4. 実践活動の状況及び効果

(1)茗野神社について

茗野神社の社殿が建立されたのは 720 年頃とされている。伝承では『海の向こうから樟の木で作られた船に乗って 9 人の神様がやってきたことから請戸沖にあった小島に神社を造った』とされ、後にこの小島は波で崩れてしまったので今の場所に神社を造り直したとされている。この伝承について、樟は南方系の植物であることから、南の国の人たちが漂着したのではないかとする研究者もいるようだ。請戸の地名も昔は浮渡と表記されていたが、このような伝承によるものだろう。

1 月 2 日に行われる出初めの際には、漁船で海上からからお参りをするが、これは崩

れてしまった小島があったとされる、港の南側の海域で行われる。また、菖野神社に祀られている神様は水神様で、天候を司る神様であることから、農業にも関係が深いことがわかる。現在のあんば様で田植え踊りや早乙女踊りが奉納されているのもこのためである。

(2)あんば様の日

- ・本殿で神事が行われ、巫女による神楽舞、獅子舞と、子供達による田植え踊り、早乙女踊りが奉納される。
- ・次に安波大明神、大杉大明神の2組の本神輿が出発する。行列は村中を廻ってから海岸にやってくる。2組の本神輿は海岸に作られた御小屋(おこや)とよばれる祭場に安置される。
- ・子供達の踊り手も本神輿と共に神社を出発し、家々を廻って祝い踊る。
- ・本神輿が海岸の御小屋に安置されると、再び諸芸能が奉納される。
- ・早朝にお祓いを受け、町内の家々を巡り歩いてきた樽神輿が海に入り神輿を清める。
- ・御小屋では潮水の濁り具合や泡の立ち方で一年間の吉凶を占う神事が行われる。
- ・昔は草競馬が行われたが今はない。

(3)あんば様の由来

あんば様は関東から東北太平洋沿岸にかけて広まっている信仰で、茨城県稲敷市阿波にある大杉神社を本社とし、菖野神社同様古い歴史を持ち、奈良時代の頃には神社の原型が出来上がっていたようだ。大杉神社のあたりには昔、大きな杉の木があり、航海の目印となっていたことから海上安全の信仰に繋がったが、後に天狗信仰が混じったことで疫病退散などの側面も持つようになった。この信仰は江戸時代(1720年頃)に房総半島から関東一円で爆発的に流行し、海運航路沿いに東北各地にも広まった。

(4)請戸地区におけるあんば様

あんば様は漁業者の祭りとしてされているが、一年の吉凶を占うことから請戸地区にとっても一番大事な祭りである。祭りの役割は細かく決められていて、漁業者だけでなく請戸地区の多くの人たちが何らかの形で関わっている。

祭りで一番大事な本神輿は年長の漁業者が受け持ち、一連の神事にも参加する。私たち青壮年部員は樽神輿を担当する。樽神輿は各家で荒々しく揉んで歩くが『手を抜くとその年は不漁になる』と言われてるので手を抜くことはできない。最後には海に入っていくこともあり、若者でなければ担げない神輿である。

(5)樽神輿の由来

さて、あんば様についていろいろと調べたが、我々が担いでいる樽神輿については資料があまり見つからなかった。浪江町史に『現在、あんば祭りの代名詞となっている樽神輿は戦後に始まったものであり、請戸の産業の比重が農業から漁業に変化した事により海上安全を願う気持ちが高まったことの現れである』と記載されている程度である。

そこで、この点について少し考えてみた。現在の請戸では沿岸漁業が中心となっているが、遠洋漁業が盛んだった時代には、請戸の漁民の中にはサンマ船や北洋漁業船団に乗り込む者も多かった。1900年代初頭から始まった北洋漁業は第二次世界大戦で一時中断したが戦後再開され、日本経済の復興と国民の食糧確保の点で大きな期待が込められたのだろう。地方の一漁村に過ぎない請戸でも、沿岸漁業や北洋船団の大漁への期待と航海安全への願いから、苕野神社やあんば様への信仰が強まり、漁業者独自の神輿である樽神輿が始まったのではないだろうか。

5. 波及効果

最近では青壮年部員も減ってきているので、部員の友人達に呼びかけて担ぎ手を確保するようにしているが、毎年人集めに苦労している。そんな中で、私たちは地域の人たちや子供たちにもっと水産に興味を持ってもらいたい、地元の漁業を知ってもらいたいと願うようになった。そのため、地域のイベントなどに積極的に協力して、請戸の漁業をPRするように努力している。

その中でも、今年から始めた食育に関する活動は非常に重要な活動だと感じている。我々青壮年部員が小学校に出向いて子供達に漁業や魚の調理法を教えるもので、今年では地元の請戸小学校6年生と、海から離れた津島小学校5年生を対象に2回実施したが、どちらも好評で、地元の新鮮な魚の美味しさを伝えられたのではないかと感じている。

このように、地域の伝統を受け継ぐと共に、子供達に地元の魚の味を伝えることで地域へと青壮年部活動の輪を広げ、地域交流や浜の活性化につなげたいと考えている。

6. 今後の課題

あんば様は県内沿岸にも広く伝わっており、大杉大明神や安波大明神の名を持つ神社が各地に点在している。各地で祭りも行われていたはずだが、毎年このような祭りを行っている所は少なくなっているようだ。聞くところによると、請戸でも一時期、担ぎ手が減って樽神輿の継続が危ぶまれたものの、請戸漁協青壮年部が担ぎ手を引き受けたことから今に続いているとのことである。

私たちは、歴史と伝統あるあんば様を後世に引き継いでいかなければならない。そのため、これからも積極的に水産のPRに努めると共に、漁業者の神輿である樽神輿を末永く続けて行きたいと思う。



図 1 請戸の位置



写真 1 出初め式の様子



写真 2 茗野神社の本神輿



写真 3 青壮年部による樽神輿海上渡御



写真 4 請戸小学校における食育活動



写真 5 浪江小学校学年行事